

第一次大戦前フランスにおける金融市場の局地性

ーフランス銀行ディジョン支店を手掛かりにー

札幌大学
武田 佑太

報告要旨

19世紀におけるフランスの金融市場は、レヴィ・ルボワイエ (Maurice Lévy-Levoyer) により、パリの有力個人銀行家層であるオート・バンクによる商取引・金融や、パリ払い手形の振り出しの常態化など、首都を中心としたネットワークの重要性によって特徴づけられる。他方、第一次大戦前のフランス銀行は、1870年代より急成長を遂げつつあった主要民間金融機関との競争により次第に収益源を奪われ、株式銀行機能を衰退させていくものとして捉えられるか、あるいは逆に、フランス銀行の経営のあり方は、銀行を介さない形で商・工・農に対して行われる直接手形割引を含めた定款外業務と支店網の拡大のような現象が株式銀行機能の維持・拡大として位置づけられている。この傾向は、同行の公的機関としての側面に関する諸研究を別にすれば、中央銀行か株式銀行かいずれの性格が優位であったかという一つの論点を形成していると言える。しかし、地方の金融市場に目を向けるならば、それと深く関わるフランス銀行が、どのような関係性の中で営業を遂行していたのかが疑問点として浮かび上がる。

支店経営全般ではなく、個別支店に限ってみるならば、ディジョン支店の場合には、上記の一般的特徴は、同支店の主要顧客としてこれらの金融機関が長年に渡って同支店と取引関係を維持した点で、同支店には必ずしも当てはまるわけではない。にもかかわらず同支店が、地域銀行としてのブルゴーニュ銀行に対しては、同行の定款や原則から逸脱する形で「最後の貸し手」として機能するケースも見られた。他方、株式銀行として同支店は、ブルゴーニュ銀行の清算後においても、新たな顧客層の開拓に従事し、直接割引の伸長にも乗り出した。しかしそこでも、主要民間金融機関との競争で劣勢に立たされた地域金融や、地域経済への貢献という動機が存在していた。

以上の特徴を、フランス銀行全体の特徴でもある当座預金勘定・当地払手形・地方支店所在地支払い地払手形の一貫した重要性とこれらの絶対額の増加と合わせて考えるならば、パリを中心とした一流顧客からなる金融ネットワークとは異なるそれが、同行の支店網により形成され、さらに局地的な金融市場すら形成されていたと考えることができる。地方における商業上の要衝でもあったディジョンの場合は、以上のような特徴を特に反映していたと言える。